

2020年2月16日 礼拝説教要旨

詩編講解説教3 「救いは主のもとに」

詩編3：2～9、マタイ26：36～39

今日は詩編第三編を読みます。新共同訳聖書では冒頭のところに1節としてこの歌の表題が書いてあります。「賛歌。ダビデの詩。ダビデがその子アブサロムから逃れたとき」ここにダビデが登場してきます。この機会にぜひダビデの物語を読んでいただきたいのですが、彼は成功した王のイメージがありますが、彼の人生は必ずしも順風満帆な人生ではありません。それは今日のこの冒頭の1節からも伺えるでしょう。「ダビデがその子アブサロムを逃れたとき」自分の子から逃げるのです。これは穏やかな話ではありません。それだけではない。前回の説教でも触れましたが、サウルという自分の前の王様から妬まれ命を狙われます。また部下を殺してその妻を奪うという大罪を犯した。ダビデはその負い目をずっと引きずって生きていました。

かつて東京神学大学の学長もなさいました竹森満佐一先生が『ダビデ』という本を書いています。その本の副題が「悔いせずおれし者」というのです。その人生は自分の罪を悔いるがゆえにくずおれる、つまり座り込んでしまうような人生だったのです。竹森先生は本の中で書いています。「まるで罪の中にのたうちまわるような生活」であったと。でもそこに人間らしさというものがあり、それゆえに多くの人々がダビデに共感するのです。わたしたちも経験があると思います。自慢話や成功談は聞いているとだんだんうんざりしてくるのですが、苦労話や失敗談は興味深く聞くのです。それは共感するからです。ああ同じだ。この人も苦労したのだ。そういう姿に励まされるのです。これからわたしたちが詩編を読む上で大切にしたいのは、この悔いせずおれるダビデの姿を心に留めながら読むということです。その時に、わたしたちはこの詩編を自らの歌として、わたしの魂の叫びとして読むことができるのではないのでしょうか。

表題にある「ダビデがその子アブサロムから逃れたとき」このことについてどうしても触れなければなりません。ダビデには何人も子どもがおりました。それは一人の母親からではなく、何人もの妻たち、また側女と呼ばれる人たち、それぞれに子どもがあったわけです。これはもちろん聖書の時代のユダヤの国の話ですから、わたしたちとは全く感覚が違うわけですが、でも少なからずそういう子どもたちの抱えている問題というのは想像できるのではないかと思います。例えば、母親が違うことで何か序列のようなものがあつたかもしれません。正妻の子と側女の子では扱いが違う、差別のようなこともあつたでしょう。またその中でも誰が父親の後を継ぐか。そういう後継者争いのようなものが子どもたちの中にあるのです。例えばそういう中でアブサロムは兄を殺してしまうのです。それは後継者争いというよりは別の要因があつたのですが、アブサロムにはおそらく同じ母親から生まれたある妹がおりました、その妹を腹違いの兄がレイプするという悲しいことが起こつたのです。その兄のことをアブサロムは憎んで復讐します。ダビデはそのことを大変悲しみました。もちろん妹を犯した兄に対しても、またその兄を殺したアブサロムに対しても悲しみ、怒りました。何より子どもたち同士でそういう争いがあることが親として耐えられなかつたでしょう。わたしたちもそうではないでしょうか。親としては兄弟みんな仲良くしてほしいのに、子ども同士でいがみ合い、絶縁したような関係になっているならば、親はいたたまれないのです。ダビデはそういう心境でした。

それだけではありません。今度はその愛する子どもが自分に歯向かってくるのです。アブサロムは父親から溺愛されて勘違いをしておりました。身の丈をわきまえないで野心を燃やすので

す。容姿も優れていたようで「イスラエルの中でアブサロムほど、その美しさをたたえられた男はなかった。足の裏から頭のとっぺんまで、非のうちどころがなかった」と聖書にあります。ダビデはアブサロムを可愛がり、甘やかします。周囲の人々にもおだてられ、自分こそダビデの後継者であると自負するようになる。そのおごりが彼をダメにしました。なんと父親ダビデを追い出して自分がイスラエルの王だと言うようになりました。ダビデもダビデで、そのような子どものわがままを許して、自分が王座を退くのです。親バカぶりにもほどがある。正面切って子どもと戦いたくない、向かい合いたくないのです。聖書にこう書いてあります。「ダビデは頭を覆い、はだしてオリーブ山の坂道を泣きながら上っていった」と。これが本当にダビデなのかと疑いたくなります。それは王としても、親としても失格なのです。でもそれはわたしたちとは関係ない話でしょうか。

愛する我が子が自分に向かってくる。そんなことは想像するだけでも悲しいことです。でも聖書は決して理想の親子とか、円満な家庭を描いているのではない。わたしたちの現実を描いています。ある元エリート官僚が自分の息子を殺してしまったという事件がありました。周囲には人もうらやむ理想的な家庭と思われていた。でも実際は我が子から日常的に暴力を受けていた。それでどうとう父親は息子を殺めてしまったのです。そこまで追い詰められてしまう。ダビデが逃げ出したのもそういうことです。自分の子に追い詰められた。アブサロムは結果としてダビデの家臣によって殺されてしまいます。とても不幸な死に方をした。ダビデはその死を嘆きました。「わたしの息子よ。わたしがお前に代わって死ねばよかった。アブサロム、わたしの息子よ」そんなダビデを家臣は叱りました。そこで気づくのです。死を持って償わなければならない罪。自分がそこから逃げていたこと。

自分の子どもと向き合えない、それは自分自身の問題と向き合わずに逃げ出したということです。それはダビデ自身の罪です。追い詰められて、どこにも逃げ場がない。どこにも救いがないと思われる。そういう時にこの歌を歌った。「主に向かって声をあげれば、聖なる山から答えてくださいます」(5節) この「聖なる山」というのは、ダビデが息子から逃れてオリーブ山の坂道を泣きながら上っていった、そのオリーブ山のことを指していると解釈することができます。ダビデはまさに四面楚歌のような状態で、でも「主に向かって声をあげた」のです。泣きながら聖なる山に上った。主に救いを求めたのです。

そしてこのダビデの切なる祈り、それはわたしたちの祈りでもありますが、それはイエス・キリストによって神さまに聞き入れられました。この切なる祈りはキリストによって満たされたのです。それは主イエスが他でもないこのオリーブ山で祈られたからです。自分の罪と向き合えない、逃げ出したそのわたしたちに代わってキリストが真正面から罪と向かい合ってくださいました。今日はルカによる福音書を読みました。そこにオリーブ山で祈られたことが出てきます。そこでは血のように汗がしたり落ちるほど、主イエスは苦しみ祈られました。それはわたしたちの罪を受け止め、真正面から罪に向かい合ってくださいました。やがて十字架で死んで行かれます。それほどに主イエスがわたしたちの罪のために苦しまれた。そしてよみがえりの命を持ってわたしたちの頭を高くあげてくださるのです(4節)。このキリストの救いにわたしたちの希望があります。